

まえがき

本書は2003年以來4年間にわたってアジア経済研究所で継続してきたアフガニスタンに関する研究会の最終的な報告である。これまでわれわれの研究会は『ハンドブック現代アフガニスタン』（アジア経済研究所企画・鈴木均編著、明石書店、2005年）および『アフガニスタン国家再建への展望——国家統合をめぐる諸問題』（アジア経済研究所企画・鈴木均編著、明石書店、2007年）を公刊して研究会の成果を世に問うてきた。3冊目となる今回の書物は、そのタイトルが示すようにアフガニスタンの対周辺国関係を関心の中心に据え、より広域的な国際関係の観点からこの国の特性とその置かれている現状を明らかにしようとするものである。

このような研究会の目的からして、方法論的にはとくに政治学、国際関係論、国際経済論、政治史の諸分野が関係している。また地域的には中東地域（とりわけイラン・トルコ世界）、ロシア・中央アジア地域、インド・南アジア地域が交錯する場所に位置しており、この点では研究会の討議の過程で各地域を専門にする各委員間の視点の擦り合わせが必要であった。同時にアフガニスタンという国はそれ自体がより広域的な国際関係がさまざまなレベルで錯綜する国であるだけに、研究会としては周辺各国の個別的な利害関係を解明するだけでなく、将来的な地域の全体像を構想することを目標とした。このため4年間の後半2年間では研究会のメンバーを若干入れ替え、より広域的な関心からアフガニスタンに光を当てることに努めた。

ここで本書の章別構成について簡単に記しておく、序章でアフガニスタンの現状についての認識と本書の意図を説明し、第1章においてアフガニスタンが国境を接する主要周辺国との歴史的関係を概観、第2章においては中央アジア諸国からインドにおよぶこの地域の戦略的な重要性の変容を「トランジット国家」としてのアフガニスタンの将来像と結びつけて展

望する。この部分はいわば本書の総論的な部分である。第3章から第5章まではアフガニスタンの主要な周辺国であるパキスタンとイランに焦点を当て、それぞれの観点から両国関係の現状と歴史的展開に検討を加えている。この部分がいわば本書の各論的な部分である。

最後に第6章においては上記各章で十分にふれることのできなかった同地域の経済発展の可能性について、周辺各国を含む国際的復興援助と新たな地域協力の動きを中心に最近の情報を整理して提示する。また各章では必ずしも十分にふれることのできなかった論点について、3つのコラムを挟むことによって内容に膨らみをもたせるよう配慮した。最後の「資料」ではこれらの議論の基本的前提条件となるアフガニスタンの多言語状況について、基本的な情報を提供するべくできるだけ客観的にまとめて提示している。

研究会を運営したこの4年の間に、ヒヤリングの講師やオブザーバー、外部のアフガニスタン関係研究会などを通じて、アフガニスタンにかかわる多数の方々とは知り合いになった。いちいちお名前をあげることはしないが、この間さまざまなレベルで研究会を支えてくださった皆様に心よりお礼を申し上げたい。本書で示されているアフガニスタンの現状についての見解が、同国の復興支援に積極的にかかわろうとする方々に何らかの指針を与え得るものとなれば執筆者一同望外の喜びである。

なお本書における表記は基本的に拙編著『ハンドブック現代アフガニスタン』（明石書店、2005年）および大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』（岩波書店、2002年）に準じたが、これだけでは賅いきれなかった例も少なくない。バルーチ／バローチおよびバルーチスターン／バローチスターンに関してはイランおよびアフガニスタンについては前者（ル）の表記を、パキスタンについては後（ロ）を用いた。また Ismail を含む語の日本語表記についてはイスマーイール派あるいはイスマーイール1世とイスマイル・ハーンというように表記が混在することになった。これらを含めてアフガニスタンおよび周辺国にかかわる統一的な日本語表記の原則の確立は、すべて今後の課題としてあることを付言しておく。

鈴木 均